

中世キリシタン文献とイエズス会の言語教育

—ローマ字本の位置付けについての考察—

王 伸 子

Abstract

Christian literature has been the subject of research from various aspects, mainly as a research material for medieval Japanese language studies, and the results have been published in a wide range of fields, including linguistics, Japanese linguistics, history, and sociology. The historical background is that during the Age of Discovery after the Reformation in Europe, Roman Catholics expanded their missionary activities to the East, and the Jesuits, whose banner was education and research, expanded their missionary activities to Japan as well. This is a clue to various aspects of 16th century Japanese. Many of the materials used in the study of the Japanese language are still being researched as phonetic, grammatical, and lexical materials, but there are also materials that were created as teaching materials for the study of the Japanese language by Europeans, including Portuguese missionaries and illuminated people who came to Japan from the Iberian Peninsula. There are also studies that refer to the aspects of Japanese language education and language learning. However, most of them focus on the text in the materials and do not focus on the contents and methods that may have contributed to the education of “speech” that does not remain in the materials. In this paper, I will try to focus on the materials that are related to the Japanese language education of the missionaries, and which are thought to have been teaching materials for speech.

1. はじめに

キリシタン文献については、これまで主として中世日本語研究資料として、様々な側面から研究対象とされ、その成果が発表されており、言語学、日本語学、歴史学、そして社会学と分野も多岐にわたっている。歴史的背景としては、ヨーロッパでの宗教改革後の大航海時代に、ローマ・カトリックが東洋への宣教活動を拡大し、教育と研究を旗印とするイエズス会が日本にも布教活動を広げた結果として、多くの文献が残り、国字、およびローマ字による文献が、16世紀の日本語の諸相を知る手掛かりとなっているというものである。日本語学の資料となる多くは、音韻や文法、語彙等の資料として、現在もなお、研究されているが、イベリア半島から宣教師やイルマン（修道士）として日本にやってきたポルトガル人をはじめとするヨーロッパ人の日本語学習の教材として作成された資料を、日本語教育の側面から研究するもの、あるいは日本語教育、言語学習としての側面に言及した研究も見受けられる。しかし、そのほとんどは資料の中の文字を中心に観察したものであって、資料として残っていない「音声」の教育に資したであろう内容・方法には焦点を当ててはいない。本稿では、そうした資料の中から、宣教師の日本語教育に関わるもののうち、音声を介した教材であったと考えられる資料に着目し、考察することを試みる。

2. キリシタン資料について

16～17世紀にかけて日本に来た宣教師などによる文献を、キリシタン文献として、日本語学の分野では扱っている。福島（1973）によると、その研究に最初に関心を持ったのは東京帝国大学で教鞭をとっていたチャンブレイン（B. H. Chamberlain、チェンバレン）で、ロドリゲスの『日本大文典』に着目したのが最も早期の研究であったということである。養方軒パウロや不干ハビアンといった日本人の関わったものもあるが、多くはヨーロッパ人イエズス会士の著した語学書、教理関係書など、29種であり、国字によるものとローマ字によるものが刊行されている。福島（1973）は、巡察師であるパードレのヴァリニャーノ（Alessandro Valignano）の来日とともに活版印刷機が持ち込まれ、コレジオ（Colegio 大神学校）、セミナリオ（Seminário 小神学校）、ノビシアド（Novi-

ciade 修練院) など宣教に関わる教育機関で日本語研究が盛んになり、本格的に文典や辞書が刊行されたと述べている。キリシタン版29種は以下の通りである。

- ・どちりな・きりしたん
- ・サントスの御作業
- ・ヒデスの導師
- ・ばうちずもの授けやう
- ・天草版 平家物語 (図1)
- ・天草版 伊曾保物語 (イソポのハブラス) (図2)
- ・金句集
- ・ラテン文典
- ・羅葡日対訳辞書
- ・コンテムツス・ムンヂ
- ・精神の鍛練
- ・精神修養の提案
- ・さるばとる・むんち
- ・落葉集
- ・ぎや・ど・ぺかどる
- ・どちりな・きりしたん
- ・ドチリナ・キリシタン
- ・おらしよの翻訳
- ・朗詠雑筆
- ・贖罪司祭のための金言
- ・日葡辞書
- ・ロドリゲス日本文典 (日本大文典)
- ・サカラメンタ提要
- ・スピリツアル修行
- ・聖教精華
- ・こんてむつすむん地



図1 天草版『平家物語』
(国立国語研究所)

https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/show.php?chapter=2&page=1&part=1

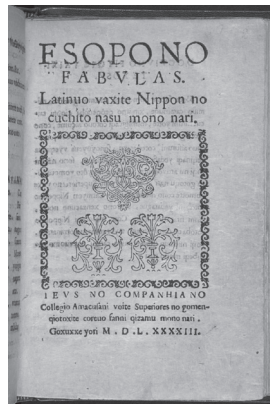


図2 天草版『伊曾保物語』
(国立国語研究所)

https://dglb01.ninjal.ac.jp/BL_amakusa/show.php?chapter=3&page=1&part=1

4 専修国文 第110号

- ・ひですの経
- ・太平記抜書

以上に、ロドリゲスの『日本小文典』が加えられるが、これは1620年、イエズス会士が日本を追放され、マカオに拠点を移した後に書かれている。

3. フランシスコ・ザビエルの来日と日本語学習

3-1. ザビエルの来日

イエズス会士フランシスコ・ザビエル (Francisco de Xavier) が1549年に日本に来たことにより、日本でのイエズス会の宣教が始まるが、もともとザビエルは中国での宣教を目的として、当時のイエズス会のアジアでの一大拠点、インドのゴアに寄港した際、九州出身の日本人、ヤジロウ (アンジロウ) に会い、日本の様子を聞いたことで、目的地を日本の鹿児島に変更したとされている。言語の研究と教育に熱心なイエズス会ではあるが、ザビエル来日後の20年ほどは、布教活動に支障が出ないほどの日本語を習得したという程度だったようである。

3-2. 先行研究

宇野 (2005) は、1557年の書簡によると日本語について、「これを話せり」という表現で伝えており、「書けり」とはしていないことから、会話はスムーズになったが、表記が複雑な日本語を用いて「書く」ということについては、もう一歩であるというニュアンスが含まれていると考えられるとしている。また、宇野 (2006) では、この時期の宣教師らの日本語教育については、日本人の伝道者を養成しており、言語の面でも、日本人の協力者が必要な時期であったと分析している。この後、1579年のヴァリニャーノの渡来で、日本語研究、日本語学習については大きな転機を迎えることとなる。

4. アレッサンドロ・ヴァリニャーノの来日と日本語教育

4-1. ヴァリニャーノの来日

ザビエルの来日から30年後の1579年、イエズス会の東インド管区巡察師としてアレッサンドロ・ヴァリニャーノが来日し、翌年より、コレジオ (Colegio

大神学校)、セミナリオ (Seminário 小神学校)、ノビシアド (Noviciade 修練院) を開設し、日本人司祭の育成と、宣教師の日本語教育を組織的に開始した。ここから、日本語学習のための教材として作成されたローマ字本も立て続けに刊行され、研究と教育に照準を当てたイエズス会の躍進が始まる。

4 - 2. 先行研究

宮武 (2019) によると、コレジオは翌1590年に島原に移り、さらに1591年には天草に移転したということであるが、この直後の1592年に、ローマ字本『(天草版) 平家物語』(Feique no Monogatari) が、また、1593年にローマ字本『(天草版) イソボ物語 イソポのハプラス』(ESOPO NO FABVLAS) が刊行されているということである。さらに、宣教師たちは日本語と日本文化や生活習慣も身につけるべく、日本語学校での学習が義務付けられたという。とくにローマ字本が日本語の教材として刊行されたということも含め、この時期に日本語教育がかなり進んだとみることができよう。

5. ジョアン・ロドリゲスの来日と日本語教育

5 - 1. ロドリゲスの来日

日本語教育に大きな役割を果たすジョアン・ロドリゲス (João Rodriguez) について述べるが、これまでのイエズス会士の来日と異なるのは、ロドリゲスはイエズス会士として来たのではなく、イエズス会士の小間使いのような少年として乗船しており、1577年、ポルトガルから到着した時は、まだ14歳ほどであったと伝えられている。教育も受けておらず、どのような経緯で乗船したかなど、詳細な記録はない。鯨澤 (1995) には、1580年にイエズス会に入会し、臼杵のノビシアド (修練院) に入り、15年ほど、日本語、ラテン語、哲学、そして神学を学んだとある。そのかわり、コレジオ (大神学校) でラテン語の教師も務め、通訳としても活躍したということである。また、その後、イエズス会の、プロクラドールと呼ばれる会計等商務関係の責任者も務めたと記録されている。つまり、イエズス会の、日本での布教活動の中枢部に深くかかわったということが見て取れる。

5 - 2. 先行研究

ジョアン・ロドリゲスについては、とくに、二種の文典をポルトガル語で上梓している。いわゆる『日本大文典』（『日本語文典』）と、『日本小文典』（『日本語文典』）である。『日本小文典』は、鎖国後の1620年、マカオで刊行されているが、『日本大文典』は1604年、長崎で刊行されている。ロドリゲスは言語習得の側面から見ると、14歳という、言語学習の臨界期をやっとすぎた頃に来日し、1610年、マカオに追放されるまで、35年間日本に滞在した。最初の10数年は、日本語、ラテン語、そして神学等を勉強したということが、その後、『日本大文典』と『日本小文典』を著わすことにつながったのであろう。イエズス会士らはその他にも、日本語研究をおこない、刊行物を残している。鯨沢(1994)によると、イエズス会日本通信には、1564年にフェルナンデスが『日本語彙・文典』を編纂し、デュアル・デ・シルバが『日本語法・語彙』をまとめたと記録しているという。さらに、1590年に天正使節が活版印刷機を持って帰国したことにより、イエズス会の日本語研究所の編纂、印刷が飛躍的に進んだとも述べられている。とくに、1958年に、字音、字形、字訓が調べられる漢字辞書、『落葉集』が刊行され、続いて1603年には『日葡辞書』が刊行され、そして、1604年のロドリゲスの『日本大文典』が出版されるに至るのである。この大文典は文法書であるが、同時に、日本語による書状の書き方や、天皇の名称などといった「日本事情」も網羅し、さらに、九州や関東の方言も扱いながら、都である京都の言葉との対比もおこなうなどの研究成果が記述されているものである。

ただ、馬場(2015)では、イエズス会とはいえ、本国から遠く離れた場所で宣教とともに教育、研究活動をおこなうには資金的援助が必要であり、日本語の研究が意義あるものだということを伝えなければならなかったと分析している。その方法の一つが、日本語のすばらしさを強調するということであり、その具体的手法は、ヨーロッパで絶対的に評価されているラテン語の枠組みに日本語が当てはまるのだ、ということを示すことであったと分析している。さらに、馬場(2015)では、「当時のヨーロッパにおいては、ラテン語の文法体系にあてはまらない言語は言語として劣ったものと考えられた」と述べられており、日本語が敬語の使用などにおいても、ポルトガル語に負けていないことを

繰り返し述べている、とまとめている。同様の観点からか、鯨沢（2012）では、『日本大文典』が「くどい文法説明」をおこなっており、「不可解な構成」でラテン語の枠組みにあてはめようとしている、と指摘している。とくに、イエズス会士のマヌエル・アルバレス（M.Alvares）の『ラテン文典』に範を求めたものだと述べており、「当時、ラテン語こそが神の言語として絶対視されていたので、あらゆる言語はラテン語文法の枠組みで分析された（中略）・・・日本語文法もラテン語文法を規範としてとらえられたのである。」と考察している。前掲の馬場（2015）では、それがイエズス会の援助を意識したものであろう、とみているのである。さらに、鯨沢（2012）が「不可解な構成」と指摘していることなどについて、馬場（2015）では「興味深い事柄が、数多く次々と書かれているのだが手際が悪い」としており、それは、ポルトガルの寒村に生まれ、教育もなく育ったロドリゲスには、全体の構成を考えながら要領よくまとめていく力といったものがなかったのであろう、としている。しかし、それを補って余りある日本語力、対照言語学的観察力には優れていたと指摘している。具体的には、「日本語の発音法」の章では、「アクセントの言い間違いによる混乱をさけるための方策として、梯子を「登りはし」、箸を「物をくうはし」、橋を「渡るはし」、端を「もののはし」、鳥のくちばしを「鳥のはし」のように、当該の語に適当な語をつけ加えて言うことを提唱している。」とし、その他の例も列挙している。

そうした『日本大文典』の特徴や特殊事情を経て、1610年にマカオへ追放された後、彼の地で著した『日本小文典』は、『日本大文典』を初学者用にまとめたものと言われているが、さらに進歩した構成、内容になっていると評価されている。鯨沢（1994）では、その特徴を「ラテン文法からの解放」と「初学者向け編集」としている。ラテン文法からの解放というのは、前述の、とにかくラテン文法の枠組みにあてはめる、ということから解放され、日本語の現状に適した文法体系で構成されているということである。

以上のように、35年間の日本滞在を経て書かれた『日本小文典』についてさらに日本語教育についての観察をおこない、ローマ字本の存在と教材の意義について考えることとする。

6. 『日本小文典』における日本語教育に関する記述

6-1. 教授法の2側面

『日本小文典』において、ロドリゲスは教授法について、意見を披露している。長年、日本で教えてきた中からの意見は現代においても通ずるものが多数あり、貴重である。

まず、宮武 (2019) で述べているように、ロドリゲスは言語習得に関して、初学者向けには以下の二つの方法があるとしている。

- ①「この地の人々と日常的に交際してこの言葉を用い、人々が様々な事柄について話すときの種々の表現・言葉遣いに怠りなく注意を払い、自然にこれを習得する方法」
- ②「よき教師の指導のもとで文法書を用い文法規則から始め、同時に誤りのない美しい言葉の込められている書物の講義を受け、作文をし、学習にふさわしい訓練を受ける方法」

これらは、『小文典』に新たに加えられた内容であり、『大文典』にはなかったものである。つまり、ネイティブと日常的に会話をするなどして、自然に学ぶ方法と、教師について文法規則から学び、よい教材を使い、ドリルをこなし、作文などの練習を大量にする、という方法である。

ロドリゲスは、第一の学習法が確実で、日本語らしく話せるようにもなり、ことばを身につけてゆく過程が、無意識のうちに習慣をわがものにするのに似ている、とし、欠点としては、時間がかかり過ぎ、現地の人と、絶えず交際していなければならない、と述べ、聖職者としては不便であるとしている。また、第二の方法については、宣教師としてヨーロッパから来る人々は、すでに文法書を用いて外国語を学ぶということに慣れているので、そのような方法に慣れている人達にとっては、取り組みやすいとしている。しかし、この方法で学習した者の中から、ネイティブ並みの運用能力のある学習者は、ほとんど出ていないと述べている。①の方法は、現在の教授法で考えると、クラッシュエンとテレルが提唱するナチュラル・アプローチに近いと考えられよう。宮武 (2019) でも、①と②は、クラッシュエンのモニター・モデルのうち「習得・学習仮説」の区別と共通するものがあると述べている。

さらにロドリゲスは、学習者別に、その到達点を仮定している。つまり、宣教活動の中でも、説教をしたり、告解を聴いたりするという、ごく基本的な宣教師としての活動をするならば、高度な日本語ではなくても、ある程度はこなしていけるが、仏教徒と討論したり、著名人や政治を司る最上流階級の人々と交流したりするためには、上品で、語彙が豊富な日本語の習得を目指すべきだと提唱しているのである。これについては、馬場（1999,2015）では、ロドリゲスの目指す日本語をその報告書や書状の中から「エレガント」（*elegância*）であるとし、その語義について、「優雅で上品である」あるいは「ことばづかいが適切」であるとしている。ポルトガル語の*elegância*については、ラテン語*elegantia*から派生して16世紀に初出しているということにも言及している。イエズス会として、異国の中枢にも布教を達成するためには、習得した言語について優雅で上品であり、ことばづかいが適切であることが必要不可欠な要素だと認識していたということであろう。この点は、日本語についてその位置づけを尊重し、言語をツールとして最大限に活用しようとしていたことが窺われ、興味深い。

6-2. ロドリゲスが提唱する日本語習得のための3要素

上記の教授法を成功させるための詳細についても『小文典』で述べている。「日本語が上達できるか否かは、以下による」として次の3点をあげている。

- ・教授に当たる教師
- ・講読に用いる書物
- ・学習の方法とその順序

教師については、「生来の」日本人、つまりネイティブスピーカーであり、さらに高度な日本語力を身につけている者が必要だとしている。ロドリゲス自身も、白杵のノビシアド（修練院）にいたころ、当時すでに70歳を超えていた修道士、養方軒パウロから日本語を指導されたようである。

講読に用いる書物については、優美な文体だと評価されている古典作家のものでなくてはならず、口語体で書かれた、*Monogatari*（物語）の書名で刊行されている物語などはふさわしくないとやっている。そして、読んでよい本は、易→難、の順に、

- ① May (舞)、Soxi (草子)
- ② Xenjixo (撰集抄)、Foxxinju (発心集)
- ③ Feikemonogatari (平家物語)、Foghen Feigi monogatari (保元平治物語)
- ④ Taifeiki (太平記)

であるとし、さらに、Vta (歌)、Xirengu (詩聯句)、Ixe monogatari (伊勢物語)、Ghenji monogatari (源氏物語) なども適当であると述べている。

7. 結び

7-1. イエズ会の日本語研究とロドリゲス

イエズス会の宣教活動のための言語教育、とくに日本における日本語教育を概観すると、フランシスコ・ザビエルからロドリゲスが言語教育に関わるようになるまでの約40年間は、ザビエルと共に鹿児島に上陸したジョアン・フェルナンデス (João Fernandes, 1526-1567 スペイン人)、ルイス・フロイス (Luís Fróis, 1532-1597) などが宣教とともにヨーロッパ人宣教師の日本語教育にもあたっていたが、ロドリゲスの来日と、その直後に第1回目の日本巡察の任にあたったヴァリニャーノの、イエズス会としての言語教育の方針から、日本語教育は大きく歩を進めたと考えてよいであろう。

ザビエルが宣教を始めた直後の記録によると、日本は中国と同じ文字 (漢字) を使用しているので、文字を介すると意味は通じるが、話すと意味は通じないらしいということや、文字は縦書きするが、理由を尋ねたところ、人間は頭が上で足が下だから、そのような順序で書くなどと返答されたというレベルの日本語の知識であったようだが、フェルナンデスやフロイスの日本語研究と、ヴァリニャーノの日本語教育に専念しないと、日本語を克服できないという判断で、日本語研究が進んだものと思われ、その結実したものが『日葡辞書』であった。

ロドリゲスの日本での行動を見ると、宣教と日本語教育に専念していたわけではなく、クーパー (1991) によると、秀吉と深く関わり、聚楽第で謁見したことも数多く、京都、名護屋にたびたび通っていたという。飛行機も新幹線もない当時、イエズス会の日本における活動の許諾を得ることと、また資金作りのためのポルトガル商人とのやり取り、会計の管理など、言語の研究どころで

はなかったのではないかと思われるような日々の中で、日本研究、日本語研究、そして教授法の研究と、驚異的な実務能力、研究能力を発揮している。

7-2. ロドリゲスの日本語教授法とローマ字本の位置づけ

ザビエル、フェルナンデス、フロイスらがイエズス会入会に至るまでに高い教育を受けてきたのと対照的に、ロドリゲスは何も教育を受ける機会のないまま、日本に上陸している。天賦の能力があったのか、日本で滞在中に誰よりも言語能力が伸びたと本国への報告書等にも記録されている。

そうした中で、イエズス会が言語能力について、「聞くこと、話すこと」を優先的に考え、教材作成をしたということは大変興味深い。まず、話しことは重点を置き、それから書き言葉へと進む段階をとったようである。

そうしたことから考えると、天草で出版したローマ字本、『イソポのファブラス』は、砕けた表現から高尚な言い回しのもまで含んだ日本語で記述されており、宣教師たちが音読し、録音機がない時代に、自分の声をモニターしながら日本語の習得をするという、音読を中心とした教本になっていたのではないとも考えられる。つまり、言語教育、とくに音声教育の側面から見ると、暗誦教材としての位置づけではなかったかと考えられるのである。秀吉の最初の「宣教師追放令」が出た1587年以降、とくに文書伝道に重点を置きながらも、宣教師の、聞く能力、話す能力を伸ばす教材がローマ字本であったと考えると、音声を介した習得のための教材が必要であったと考えることができよう。

これについては、日本語話者とポルトガル語話者による音読の再現を試みて考察したという研究は管見の限りまだないことから、引き続き、今後の研究課題としたい。

参考文献

- 石田総司 (2007) 「『イソポ物語』の受容史の研究」
犬養隆 (2012) 「天草版平家物語と平家正節のt入声」『節林』60、愛知県立大学
井上章 編 (1964) 『天草版 伊曾保物語』風間書房
今泉忠義 (1968) 『日葡辞書の研究 音韻』桜楓社

- 宇野有介 (2005) 「イエズス会宣教師達と日本語—ザビエル来日から1560年代までを中心に—」『二松学舎大学人文論叢』74号、pp.162-146、二松学舎大学
- (2006) 「1565年～66年におけるイエズス会宣教師の活動について—
仏教徒の対立と日本語の学習状況を中心に—」『二松学舎大学人文論叢』77号、
pp.184-167、二松学舎
- 遠藤潤一 (1993) 『伊曾保物語第二種本の翻刻と本文研究』風間書房
- 何群雄 (2000) 「初期入華キリスト教宣教師にかかわる中国語教育と研究の事情について」『一橋論叢』第124巻第2号、pp.257-275、一橋大学
- 鯨澤千鶴 (1994) 「ロドリゲス「日本小文典」の独自性について」『上智大学国文学論集』 pp.55-72、上智大学
- (1995) 「ロドリゲスのめざした日本語 (その一)」『上智大学国文学論集』 pp.53-71、上智大学
- (2012) 「ロドリゲス『日本大文典』の謎」『ソフィア：西洋文化ならびに東西文化交流の研究』 pp.69-81、上智大学
- (2018) 「『日葡辞書』の日本語教育的価値—複合動詞をめぐって」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』第26巻、pp.70-84、清泉女子大学
- (2019) 「モラエスと日本語文法書」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』第27号、pp.65-87、清泉女子大学
- (2020) 「『マニラ版日西辞書』の見出し語—『日葡辞書』と比較して」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』第28号、pp.23-50、清泉女子大学
- 門田明 (1995) 「アンジロウとヤジロウ—音声学的覚え書き—」『人文学会研究会発表要旨』
- 岸本恵実 (2018) 「キリシタン語学書の展開：ジョアン・ロドリゲスとアレクサンドル・ド・ロード」『語文』110、pp52-66、大阪大学
- 清瀬良一 (1982) 『天草版平家物語の基礎的研究』溪水社
- 熊田和典 (2007) 「17世紀の音声学者の半母音[j]と[w]の記述」『埼玉学園大学紀要、人間学部篇』 pp39-52、埼玉学園大学

- 高瀬弘一郎 (1994) 「マカオのセミナリオ」『史学』 vol.64, No 1、pp 1-54、三田史学会
- 高橋強 (2016) 「マカオ・コレジオ所蔵の日本語学習書籍に関する一考察」 pp.1-23
- 高見澤孟 (2004) 「日本語教育史 (1) 外国人と日本語」『学苑・日本文学紀要』 767、pp.1-7、昭和女子大学
- (2005) 「日本語教育史 (2) 西洋人と日本語の出会い」『学苑・日本文学紀要』 771、pp.1-10、昭和女子大学
- (2005) 「日本語教育史 (3) 江戸時代の外国人日本語学習者」『学苑・日本文学紀要』 779、pp.2-9、昭和女子大学
- (2005) 「日本語教育史 (4) ヨーロッパにおける日本語研究」『学苑・日本文学紀要』 780、pp.1-9、昭和女子大学
- (2005) 「日本語教育史 (5) 「来日欧米人の日本語教育」『学苑・日本文学紀要』 781、pp.1-9、昭和女子大学
- (2006) 「日本語教育史 (6) 日本語研究専門家の登場」『学苑・日本文学紀要』 783、pp.1-12、昭和女子大学
- (2006) 「日本語教育史 (7) 米国国内における日本語教育」『学苑・日本文学紀要』 783、pp.77-87、昭和女子大学
- 土井忠生、大藤時彦、山田俊雄編『日本語の歴史4 移りゆく古代語』平凡社
- 狭間芳樹 (2005) 「日本及び中国におけるイエズス会の布教方策：ヴァリニャーノの「適応主義」をめぐって」『アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想研究会』 第3号 pp.35-70、京都大学
- 馬場良二 (1999) 『ジョアン・ロドリゲスの「エレガント」：イエズス会士の日本語教育における日本語観』、風間書房
- (2015) 『João Rodriguez 『Arte grande』の成立と分析』、風間書房
- 福島邦道 (1973) 『キリシタン資料と国語研究』 笠間書院
- (1983) 『続キリシタン資料と国語研究』 笠間書院
- (1995) 『続々キリシタン資料と国語研究』 笠間書院
- 松岡洸司 (1991) 『国語学研究1 キリシタン語学—16世紀における—』 ゆま

に書房

丸山徹 (2000) 「『古典』としてのキリシタン文献—その語学書について」『古典学の再構築』第8号、pp.59-65

宮武利江 (2019) 「キリシタン資料に見る日本語教育—規範意識と教育理念—」『文教大学国文』48号、pp.19-29、文教大学

宮永孝 (1996) 「マカオの聖パウロ教会と日本人：「聖ミカエル大天使」を描いた謎の絵師」『社会労働研究』42巻4号、pp.165-189、法政大学社会学部学会

----- (2004) 「安土・神学校（セミナリオ）の遺跡」『社会志林』51巻2号、pp.140-87、法政大学社会学部学会

----- (2012) 「マカオの日本人キリシタン」『社会志林』59巻2号、法政大学社会学部学会

泰田伊知朗 (2019) 「フランシスコ・ザビエルが携わったアジアにおける語学教育」『韓国学研究』18、pp.117-125、東洋大学

ロドリゲス、池上岑夫訳 (1993) 『日本語小文典』岩波文庫